

フィリピン南部・ミンダナオ島で、貧しい子供への本の読み聞かせや奨学金支援などを6年前から続ける。異なる宗教、民族が同居する島で見つめた絵本の効用と、子供同士の触れあいの大切さを、一時帰国した祖国で訴えた。

出版社の編集者を辞め、講演などで暮らしていた8年前、うつ状態になった。「気分転換に」訪れたミンダナオ島で、貧困の中、生き生きと

ひと

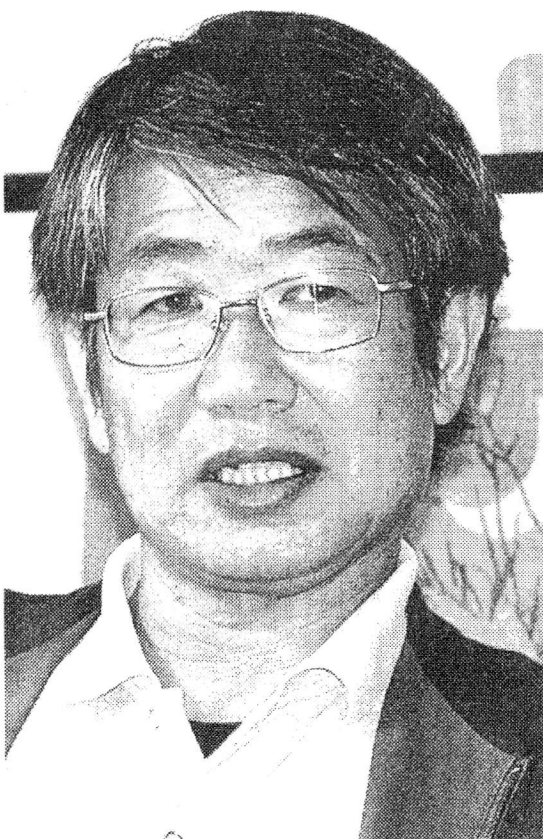
まついとも 松居 友さん(56)

ミンダナオ島で
子供たちを支援する

した子供たちに心を癒やされた。だが、1年後に再訪した島で、子供たちに笑顔はなかった。武装勢力と政府軍の戦闘は、子供たちから親や家を奪った。

「自分は子供たちに救われ

た。今度は自分の番」。頭が浮かんたのは、編集者として手がけた絵本だった。1年の大半を島で過ごす生活が始まる。毎週末、支援する子供たちを連れ、島内の山村を訪れる。イスラム教の子



東京都出身。フィリピン人の妻と2女。日本文芸家協会会員。著書に「絵本は愛の体験です」(洋泉社)など。

が先住民の子に絵本を読み聞かせたり、移民の子が読み手になったり。「最初は相手を怖がることであっても、子供たちはすぐに打ち解ける」。日本からの寄付を基に、医療資金や奨学金の援助も行う。昨年、洪水の被災地で、難民キャンプから女の子が走り寄って来た。以前、医療支援で手術が成功した少女だった。「ありがとう」が言いたかったという。小さな喜びの積み重ねが活動の原動力だ。

この秋、日本に滞在しながら各地で講演した。近い将来、ボルネオ島やタイにも活動範囲を広げるのが目標だ。

文と写真・宮川裕章